

## 京都市多文化施策懇話会 2012年度（平成24年度）第3回会議摘録

日 時：2012年（平成24年）11月26日（月）午後1時～3時15分

場 所：京都YWCA ホール

議 題：「外国籍市民等と地域交流 ～日本語教室の取組～」

出席者：京都市多文化施策懇話会 第2期委員 10人（欠席：河田委員，オレーナ委員）

京都YWCA にほんご教室「洛楽」担当 井上依子氏

「やさしい日本語」有志の会代表 花岡正義氏

京都市国際化推進室5人

傍聴者：1名

次 第：1 開会

2 座長による前回会議の振り返り

3 報告1「京都YWCA日本語学習支援について」（担当：井上依子氏）

4 報告2『『やさしい日本語』と『やさしい日本語』有志の会』（担当：花岡正義氏）

5 事務局説明1「京都市が実施している日本語教室に関する取組」

6 事務局説明2「京都市避難所運営マニュアルの策定について」

7 意見交換

8 座長によるまとめ

9 次回会議について（事務局説明）

10 閉会

### 1 開会

### 2 前回会議の振り返り

西岡座長：多文化共生マネージャー全国協議会事務局の時光(とき ひかる)様から、東日本大震災時に仙台市で外国籍市民等への支援活動に携わったご経験をご紹介していただくとともに、地域レベルで多文化防災の取組を進めることが重要とのご意見をいただいた。具体的な問題として、外国籍市民等は防災知識が不足していることが多いことや、言葉の壁が存在するため、災害時には、日頃からのコミュニケーション不足などの問題が顕在化し、二次被害に遭いやすいとご指摘いただいた。

### 3 京都YWCA 井上依子氏からの報告

#### (1) 京都YWCAについて

- ・1923年に設立
- ・現在は「子育て支援」，「外国人支援」，「東日本大震災被災者支援」，「次世代育成」の4事業を中心に活動

#### (2) にほんご教室「洛楽」について

- ・留学生の配偶者に日本語を学ぶ機会を提供する目的で，1995年に発足
- ・現在，ボランティアの講師17名で活動している。
- ・14クラスが活動（外部で3クラス：介護士研修生への個別支援等）

#### (3) 学習者について

- ・年間の学習者数は約40名（8割が女性）
- ・学習者の出身国あるいは母語：韓国が多い。その他，フィリピン，フランス，中国等
- ・利用者：日本人の配偶者，研究者・留学生の配偶者が大半。学習期間は数か月～数年

#### (4) 保育付き教室，児童向け教室の実施

- ・2009年度に京都市国際交流協会の助成を受けて保育付き教室をスタート。学習者が一時，子どもから離れて学習に専念できるようになった。

- ・通常は成人を対象として日本語教室を行っているが、緊急性が高いと認められた場合、児童を対象として教室を実施することもある。学校授業の補修や、漢字ドリルを使用している漢字学習等を実施した。

#### (5) 保育付き教室の実施状況

- ・2010、2012年度に「子育てのための日本語教室」を実施。日本で子育て中、あるいは今後、日本で子育てを予定している外国籍市民等の父母を対象とし、「結婚・出産」「健康・安全」「子育て・教育」など日常生活に関するテーマで日本語教室を実施
- ・お弁当の料理実習や日本人のお母さんたちとの交流、消防署の協力を得ての119番のかけ方や消火器の使い方を学ぶ防災学習も実施
- ・学習者の方（外国籍のお母さん）と日本籍のお母さんとの交流会では、韓国ドラマの話などで盛り上がる場面も

#### (6) 学習者のその後

京都YWCAで日本語を学んだ方々が、様々なイベントや地域の活動に取り組んでおられる。

- ・京都YWCA主催のイベントで、講師として日本での体験や自国の文化を紹介
  - 日本の文化・習慣の何が特徴的で、外国から見ると理解しにくいのか、外国籍の方に指摘してもらおう。（例：何度もお礼を言う、贈り物にお返しをする、「いつでも遊びにおいで」という言葉は社交辞令）
  - 日本の言葉や文化を教える側が、自国文化の特徴に気づき、教えられる場ともなっている。
- ・京都YWCA主催のバザーにおいて、出店で自国の料理を提供
- ・地域でお母さんの達の子育て支援活動を実施（子どもの名前と緊急連絡先の電話番号を記載した名札を子どもに付ける）

#### (7) 日本語教室の役割

- ・新しい環境で生活する外国籍市民等が、生活上の事柄を初めて「知る」お手伝い・生活支援
  - 子どもの保育所への入園手続や病院への通い方、防災情報（「避難」「震度」といった独特の言葉使い、「避難所」というものが存在すること）等を学んでもらう
- ・日本語学習支援だけではなく「学び合い」の場、異なる文化をつなぐ場
  - 「こういうことって何か変じゃないですか」と学習者に指摘されて、教える側も学ぶことがある。日本で生まれ育った人にとっては当たり前のことが、外国から来た方にとっては当たり前でないことに気づききっかけとなる。

#### (8) 日本語教室の課題

- ・今後、外国籍市民が増えることが見込まれるなかで、就労、子育て、介護等さまざまな状況下で生活している方の日本語学習のニーズに対応していくこと
- ・その人の立場になったときに、何が必要か考え、一緒に生活上の課題を解決する。
- ・支援するだけではなく、京都で生活する者同士、共に社会をつくっていく。

### 4 「やさしい日本語」有志の会花岡正義氏からの報告

#### (1) 京都にほんごRings

- ・京都府下で日本語教室を実施している16団体が加盟。京都市内では7団体
  - 地域によって教室が偏在しているのが課題
- ・日本語ボランティアの研修や、京都府下での日本語教室開講支援に取り組んでいる。

#### (2) やさしい日本語有志の会

- ・やさしい日本語で防災・災害情報を伝えるという取組から、2008年に有志の会が発足
- ・各地域での日本語教室を通じ、やさしい日本語で防災・災害情報を伝える取組を広げている。
- ・やさしい日本語を使用した防災ガイドブックを作成（京都府国際センター）

### (3) やさしい日本語について

- ・阪神・淡路大震災の際、日本語能力の十分でない方に災害情報をきちんと伝えることができなかった、という課題から始まった取組
- ・日本語能力試験のN4（以前の区分で言う3級）相当の日本語（漢字は小学校2年生程度）
- ・敬語や擬音語・擬態語、「豊かな日本語表現」を避ける
- ・京都府では、防災に関するワークショップの実施数が他府県に比べて少ない。今後、防災に関する取組を府下で広げていくことが課題

## 5 事務局説明1「京都市が実施している日本語教室に関する取組」

## 6 事務局説明2「京都市避難所運営マニュアルの策定について」

## 7 意見交換

西岡座長：井上様の報告では、言葉だけでなく、生活習慣や文化も共に学んでいくことの重要性を指摘いただいた。花岡様からは、災害情報のなかには、日本語を母語とする私たちにとってすら理解が難しいものがある、という問題提起をいただいた。また、京都では、防災に関する講演やワークショップの取組が少ないとのご指摘もいただいた。事務局からは、京都市国際交流会館や、京都市内各地域での日本語教室について、充実した取組が行われているとご紹介いただいた。

金委員：10年、20年と日本で暮らしていて、日本語も話せて仕事に就いておられる方でも、読み書きができない、という方がかなりおられる。行政から送られてくる文書が読めない、区役所等での手続きがうまくできない、という問題は切実である。また、買い物に必要な日本語を日常生活で学ぶことはできても、仕事に必要な、例えば接客の日本語を学ぶ機会は少ない。こうした日本語学習に関する相談をどこにすれば良いのか、困っている方も多い。

柴田委員：京都市国際交流協会には、ご紹介できるボランティアはたくさんおられる。

井上様：京都YWCAでも、ご相談には乗れると思う。

花岡様：京都府国際センターでも優秀な日本語講師をご紹介できると思う。登録はしたものの、活躍の場がない、というボランティアの方は多い。交通費さえ負担してもらえれば、謝礼は必要ない。

西岡座長：講師の紹介だけでなく、日本語教室の実施を継続的に支援する枠組が大切だ。日本語学習に関する相談に乗ってもらえる窓口について情報提供することも重要である。

柴田委員：教室を実施する際、一番問題になるのは場所の確保だ。

片山委員：京都市内でも色々な日本語教室があり、個々に特色もあると思う。それぞれが役割分担しながら繋がり、選択肢が広がれば良い。こうした多様な日本語教室を分かりやすく一覧にして、利用者が個々の教室を比較・選択できるよう、インターネットやスマートフォンのアプリケーションを利用した情報提供の仕組があると良い。

有田委員：オールドカマー、例えば在日韓国・朝鮮人一世の方などは、日本語の読み書きができない人も多い。日本国籍取得者や中国帰国者、同和地域の方にも、識字面で課題のある人がおられる。また、日本語を学びたいと思いながら、どこへ相談すれば良いか分からない人がいる。本当のゼロ初級者が学べる日本語教室を行政の窓口等で把握し、ワンストップで情報提供できるようにしておくことが望ましい。日本語教室には、地域社会で人間関係を作り、コミュニケーションを高める役割もある。こうした教室運営のためには、講師以外にコーディネーターが欠かせない。こうした人のマネジメント力を高めていく取組が求められる。大阪では、府内一円の日本

語教室の講師等の支援者と学習者が集う交流会が毎年開かれている。京都YWCAの取組で、学習者と支援者が交流し、文化を学び合っている事例が紹介された。こうした取組を広げ、学習者と支援者が交流を深めると同時に、各日本語教室が互いにネットワークを広げていく場があると良い。また、日本語教室の場で、学習者が様々な相談事をすることがある。この相談内容を行政に伝え、施策に活かしていくと良い。

姜 委 員：外国籍児童の日本語学習を支援しようとした際、児童が通っている学校との関係で制約があり、断念したことがある。児童の名前と緊急連絡先を書いた名札を付ける、という活動が紹介されたが、こうした取組も、個人情報保護との兼ね合いがある。

プリマヴェーラ委員：フィリピン人女性が、日本人の夫から自然に日本語を学んだりすると、男性の言葉使いが身につけてしまうことがある。より広く日本語を学習する教室が求められる。

張 委 員：日本語検定試験を受けたい、あるいはアルバイトや仕事に役立つ日本語を学びたい、という希望をもっている人も多い。学習者の多様なニーズに応える日本語教室を開講することも課題だ。

福 井 委 員：私の住む向島の中国帰国者の方々は高齢化が進んでおり、言葉の支援の問題は切実だ。地域包括支援センターや病院に通訳者を配置する等の取組が求められる。

プラー委員：就職活動に役立つ日本語、たとえば面接の仕方や接客の仕方等を学ぶ機会があると良い。

西 岡 座 長：支援するボランティアの育成と確保、外国籍児童の日本語学習、そして仕事に活かせる日本語の学習など多様なニーズに応える、といった課題提起がなされた。日本語教室を実施している立場から、京都YWCA、京都市国際交流会館からコメントいただきたい。

井 上 様：日本で仕事に就くためには、日本語検定1級の資格がないと厳しい。京都YWCAでも利用者のニーズに応じて、上級クラスや日本語検定の対策クラスも行っているが、日本語学校ほどの専門性は備えていない。レベルや時間帯等、学習者と講師とのマッチングが上手くいかないこともある。私たち個々の団体ができることは限られているが、片山委員がおっしゃったように、各日本語教室が個性・魅力を活かしながら役割分担していきたい。

柴 田 委 員：京都市では、同和地域での取組も含めて、様々な識字教育を行っている。京都市国際交流会館でも、個々のボランティアが会館ロビーを利用して、日本語検定1級など高いレベルを目指した日本語教育の取組を自主的に行っておられる。京都市国際交流協会のウェブサイトに関係団体のリンクを貼る等、ネットワーク化にも取り組んでいる。

## 8 座長によるまとめ

西 岡 座 長：言葉を学ぶことは、生活を学ぶことに結びついており、深く広い問題だ。「教えてあげる」ではなく、「互いに学び合う」「気づかされる」という多文化共生の姿勢が大切だ。また、それぞれの日本語教室が、外国籍市民等に直接、情報を伝えることは難しいので、間に入って情報を一元化し、ワンストップで提供する団体や、日本語教室を運営するコーディネーターの重要性を改めて感じた。

## 9 次回会議について（事務局説明）

### 10 閉会